

昨年に続きL.ハミルトン選手が鈴鹿でポール・トゥ・ウィン!



他の追従を許さないパーフェクトな走り
で鈴鹿3連勝のL.ハミルトン選手。

鈴鹿サーキットでの開催30回の節目を迎える、2018年のフォーミュラ1世界選手権シリーズ日本グランプリ。鈴鹿に馴染み深いF1レジェンドドライバーによるトークショー、往年のマシンのデモンストレーションラップ等、さまざまな記念イベントが行われるということもあり、前年を上回る数のファンがサーキットを訪れた。なお2017年は開催3日間で約13万7000人の入

場者だったのに対し2018年は約16万5000人と、およそ2割のアップとなっている。

また、2005年の日本グランプリで驚異の16台抜きで優勝を飾ったK.ライコネン選手が、今季限りでフェラーリを離れることが決定、フェラーリでのラストランにも注目が集まった。そして8月末には鈴鹿サーキットでの開催が2021年まで延長契約されたというニュースもあり、とにかく話題に事欠かない一戦となった。

ここまでシーズン16戦を終えて、メルセデスのL.ハミルトン選手が8勝を挙げてポイントリーダー。それを追うのが50ポイント差でフェラーリのS.ベッテル選手と、ドライバーズランキング争いは混沌としている。また、コンストラクターズランキングはメルセデスの495ポイントに対しフェラーリが442ポイントと拮抗状態。残すは鈴鹿を含めて5戦、優勝

1. 予選は天気の移り変わりの激しさに各チームとも翻弄されたが、決勝はドライコンディションに恵まれた。2. 予選で1分27秒のタイムを叩き出し、通算80回目のポールポジションを獲得したL.ハミルトン選手。





3.15番グリッドから登り詰めたD.リカルド選手は4位入賞。
 4.5.メルセデスの1-2に貢献した2位のV.ボッタス選手。
 6.7.M.フェルスタッペン選手はアグレッシブな走りで見事3位に。
 8.5位には来季の去就が気になるK.ライコネン選手。
 9.S.ベッテル選手は接触で一時的に沈むも6位入賞。10.7位入賞のS.ペレス選手。11.R.グロージャン選手は8位入賞。12.9位入賞はE.オコン選手。13.C.サインツJr.選手は10位入賞。

しかしL.ハミルトン選手は前日の好調そのままに、難しいコンディションをものともせず、ここでもトップに立った。

そして同日15時から行われた予選Q1は全20台で行われ、路面はドライコンディションながら雨が降ったり止んだり、各チームとも天候の崩れが気になるころ。ザウバーのM.エリクソン選手がQ1開始早々にクラッシュして赤旗中断という波乱の幕開けの中、今季、不振が続くマクラーレン勢は、F.アロンソ選手とS.バンドーン選手がQ1で敗退した。

5台がノックアウトされて15台が進出したQ2。Q1とは打って変わって、時折、陽が射すまで天気は回復。ここでQ3に進めた場合、このQ2で使用したタイヤを決勝で使用しなければならず、翌日の天候と路面状況を考慮したタイヤ選択を迫られた。フリー走行から好調なメルセデス勢は2台ともソフトタイヤ、レッドブ

ル勢とフェラーリ勢はともにスーパーソフトをチョイス。結果、ボッタス選手、ハミルトン選手、ベッテル選手、ライコネン選手の順にタイムを刻み、レッドブルのM.フェルスタッペン選手が5番手に入る。

命運を決めるQ3は10台で決勝グリッドを争う。ここで目覚ましい飛躍を遂げたのはB.ハートレー選手とP.ガスリー選手のトロ・ロッシ勢。ホンダエンジンの母国開催ということで注目が集まった2台が前って6番手と7番手を獲得、今シーズン最高位からのスタートとなった。そしてフロントロウはポールポジションのハミルトン選手とボッタス選手で、フリー走行から予選までメルセデス勢が安定ぶりを発揮した。フェラーリ勢はタイムアタック時のタイヤ選択が天候と上手く噛み合わず、ライコネ

14.15.予選6番手と自己最高ポジションを獲得したB.ハートレー選手だが結果は13位。16.17.7番手スタートのP.ガスリー選手は期待を背負ったものの11位に終わった。



してアドバンテージを稼ぎたいところだ。

金曜日、大型の台風25号の接近が予想されつつも、曇り空の下で行われたフリー走行。ハミルトン選手が好調な滑り出しで、FP1とFP2でトップを獲得。2番手にはV.ボッタス選手が入り、他チームが1分29秒台で争っている中、メルセデス勢は2台とも1分28秒台を叩き出し、堅実な速さを見せた。

土曜日、降雨に見舞われつつも、途中で青空も見るといった不安定な天候の中で行われたFP3。ライコネン選手がコースオフのアクシデントと、ルノーのN.ヒュルケンベルグ選手がクラッシュで赤旗中断という波乱が続く。し



18.メルセデス勢が1-2フィニッシュ。L.ハミルトン選手は鈴鹿3連覇で感無量の様子。19.3位のM.フェルスタッペン選手へのトロフィー授与はJAF矢代会長。



決勝日は天候にも恵まれて約81,000人の入場者で賑わった鈴鹿サーキット。



5807分の1サポーター企画。マシンには5807人の名前が所狭しと掲載されていた。



会場のいたるところに出没したF1ボブルヘッド。GPスクエアでF.アロンソ選手に遭遇。



会員限定ホスピタルラウンジが設置されたJAFブースも、来場客で大盛況だった。



往年のマシンが走行するレジェンドF1アニバーサリーラップ。ゲストも超豪華!



レジェンドF1でマクラーレン・ホンダMP4/6を走らせたのは佐藤琢磨選手。



GPスクエアのF1ステージでは、レジェンドドライバーによるトークショーが開催。



クラシックカーでのパレードでスタンドのファンに手を振るK.ライコネン選手。

ン選手が4番手につけるのが精一杯、Q2では3番手だったベッテル選手は9番手に沈んだ。

日曜日、台風は鈴鹿サーキットに近づくことなく日本海側へ抜け、好天に恵まれた決勝日

行中のフェルスタッペン選手がコースオフ、コース復帰の際に4番手のライコネン選手と接触し、その隙を見計らってベッテル選手が4番手までジャンプアップ、という息もつかせぬ展開

が1周目から繰り広げられた。

セーフティカー導入を挟んで8周目、今度はフェルスタッペン選手とベッテル選手がスプーンで接触。フェルスタッペン選手は3番手のポジションをキープをするも、ベッテル選手はスピノフの影響で最後尾に沈んだ。

17周目から各チームのタイヤ交換が始まり、トップを走るハミルトン選手は24周目にピットイン。上位陣はひと通りタイヤ交換を済ませ、トップがハミルトン選手、2番手ポッタス選手、3番手フェルスタッペン選手、4番手D.リカルド選手、5番手ライコネン選手のオーダーで、そのままレースは終盤へ。

ハミルトン選手は危うげなくトップでチェッカーを受け、イタリアグランプリから4連勝となり、タイトル獲得へ向けて一歩前進した。ポッタス選手とフェルスタッペン選手による2番手争いは、ポッタス選手が辛くも逃げ切って2位獲得。3位はフェルスタッペン選手。

イコールドライバーのワンメイクレース「PCCJ」は若手ドライバーのプロ登竜門的存在!



三つ巴のバトルを繰り広げたPCCJの最終戦。優勝は星野選手(中央)、2位は近藤選手(右)、3位は上村選手(左)。



F1サポートレースのボルシェカレラカップジャパン(PCCJ)は最終戦の第11戦が開催された。近藤選手がシリーズタイトルに王手をかけたこの一戦、それを阻もうとシリーズ2番手の上村優太選手はポールスタートながら痛恨のミスで3番手に転落。その隙に好スタートを切った星野敏選手がトップに躍り出て、上位3台は混戦状態。上村選手は9周目で近藤選手を抜いてミスを挽回するも、星野選手が僅差で逃げ切り初の総合優勝を飾った。またシリーズチャンピオンは2位の近藤選手が獲得した。